

学校の評価，選択，経営に関する研究

—東京大学教育学部附属学校等における アンケート調査の結果から—

浦野東洋一

はじめに

附属学校長を併任している大阪教育大学の中谷彪教授は、「附属学校の存在意義を考える」と題した論文のなかで、「文部省の附属学校論」という節を設け、次のように述べている。長文の引用となるが、貴重な資料と思われるので、お許し願いたい。

「1）附属学校不用論または廃止論

附属学校は、法的にもその設置目的が明記され、その果たすべき任務も重要かつ多様である。にもかかわらず、例えば『週刊朝日』（1993，11，12号）に見るように、附属学校不要論または廃止論を聞いたりするのは、どうしてであろうか。それは、これまで、附属学校がその存在意義を十分には示して来なかったからではなかろうか。

したがって、これからの附属学校は、常にその存在意義を問い直し続け、絶えずその設置目的に即した任務を積極的に果たして行かなければならないのではなかろうか。換言すれば、不要論や廃止論がでないように、その存在意義を実績を以て示していかなければならないのではなかろうか。

最近も、文部省のある担当官は、次のように言っている。

『教員養成大学・学部の卒業生の教員への就職率は約50％である。この率でいけば、教員養成大学・学部は、現在の半分でよい。したがって、附属学校も半分でよい。』『以前は、文部省の外部の省庁から、教員養成大学・学部に対する批判が来ていたが、最近は文部省内部から、教員養成大学室に対して批判がくるようになった。』

これは、主として教員養成大学・学部に対する批判であるが、附属学校不要論も、はっきりと主張されてきている。文部省のある係官は、附属学校関係者との談話のなかで、『附属学校はエリート化している』『公立学校との人事交流が停滞している』『有名校化している』『教育

研究活動が停滞している』『教育実習に対して積極的でない』『大学との研究交流がない』等と附属学校の現状批判を行い、『こういう状態であれば、附属学校など不要ではないか』と発言したという。また、ある係官は、附属学校の果たすべき任務について、『附属学校の本来の目的に戻れ』『附属学校の存在意義を示せ』『学習指導要領に役立つ研究をせよ』『公立学校に還元できる研究をせよ』『先導的試行を引き受けよ』『文部省に役立つ研究をせよ』と言ったという。また、ある係官は、附属学校は事あるごとに『予算をつくれ』と要求するが、『予算をつけるに値するプランと実績を示して欲しい』とも言ったという。

文部省係官のこれら一連の発言を、私たちはどう受け取ればよいのであろうか。

2）文部省の附属学校に対する要望

文部省は、附属学校に対して、いかなる要望を持っているのであろうか。1993年度の『全国国立附属学校園長会議』での文部省担当者の発言を、私のメモを参考にして列挙し、必要な項目については、若干のコメントを加えることにする。

①設置目的に則した学校運営

これは、先に述べた附属学校の存在意義を踏まえた学校運営をせよということである。

②公立学校との適切な人事交流の促進

公立学校との人事交流を図り、附属学校の活性化と公立学校との関係を密にする。教員の採用に当たっては、教員採用試験合格者以外の者の採用を止めること。

③教員の服務規律の徹底と保護者との適正な関係の保持

教育公務員としての自覚を高め、モラルの維持強化に努めるということ。

④大学・学部との連携の強化

附属学校はその附属する大学・学部と教育研究上の連携を強化すること。

⑤学校管理運営体制の明確化

校長を中心とする学校管理体制の確立を図ること。
教官（職員）会議は最高議決機関ではなく、諮問機関として位置づけること。

⑥『学習指導要領』に基づく国旗・国歌の取り扱いの徹底。

一部未実施の学校があるが、早急なる実施をお願いしたい。

⑦入学者選抜の改善，進路指導の適正化に努力を

入試問題の適正化，入試選抜制度の適正化及び内部連絡進学制度の適正化に努めて欲しいこと。

⑧保護者に過度に教育費負担を課さないこと。

⑨学校における事故の防止。

⑩転入・転学者の受け入れの促進。

転勤・移転に伴う転入・転学者の受け入れ制度の促進。

⑪教育公務員法第20条に基づく研修の実施

週1日の自宅研修日を制度化している附属学校があるが、これは不法である。勤務場所を離れて研修を行う場合は、本属長の承認を受けるようにすること。

⑫その他

以上である。」¹⁾

また、附属学校長だけではなく全国国立大学附属学校連盟理事長を併任している埼玉大学の中村純男教授は、次のように書いている。

「折りから、教員養成系大学、学部は、きわめて厳しい状況に置かれております。『教育学部の冬』という言葉も使われておりますように、主として児童生徒の減少に伴う教員の需要関係の変化のため、卒業後教職に就く学生数が激減してきていることから、教員養成系学部はそのそもそもの存在意義を問われ、それに付随して附属学校の方も、その存在意義ばかりでなく、存在そのものが問われているといった面があります。教育学部の規模の縮小、附属学校の廃止ないし統合という見通しも、あながち杞憂とばかりは言えない状況になっております。附属諸学校といたしましては、いまや生き残りを賭けて奮闘しなければならない立場に立たされている、と申しても過言ではなからうと存じます。」²⁾

どうやら、国立大学附属学校長の間には、附属学校の存続について関心をもち始め、あらためて附属学校の存在意義について考えてみるという雰囲気広がりがつつあ

るように見受けられる。

私自身も附属学校長を併任しているので、こういう状況のもとでは、まずは客観的な自校の評価（自己認識）が必要であると考えた。関係当局者、広くは国民に対して説明できる客観的なデータが欲しかったわけである。そこで昨年（1993年）末に東京大学教育学部附属中・高等学校の生徒、保護者、卒業生に対し、アンケート調査を実施した。

ついで、他校と比較してみる必要を感じ、今年（1994年）の1月から2月にかけて、名古屋大学教育学部附属中・高等学校の生徒、保護者、卒業生を対象としたアンケート調査、ならびにX県公立高校1校、Y県公立高校8校、Y県私立女子高校1校の高校2年生を対象としたアンケート調査を実施した。

本報告は、これらのアンケート調査結果の若干の項目について考察し、当事者としての実践的な観点から、「学校の評価、選択、経営に関する研究」の一端にせまろうとするものである。

なお、時間の制約から、本報告においては、調査対象数や回収率等についての説明を省略したい。そのことについては配布資料（データ表）を参照されたい。

I 学校の選択

まず、東大附属の中学校1・2年生に「東大附属への入学を選んだ理由」（複数回答）を聞いた結果は、次のとおりであった。

	男 (%)	女 (%)	計 (%)
1. 高校受験がないから	62.4	63.0	62.7
2. 公立中学校へ行きたくなかったから	36.8	43.7	40.3
3. 双生児だから	9.4	16.0	12.7
4. グランドが広く、緑も豊かだから	53.0	39.5	46.2
5. 自由な校風だから	59.0	69.7	64.4
6. いじめや校内暴力がなさそうだから	12.0	16.0	14.0
7. 自分の学力水準に適していたから	20.5	28.6	24.6
8. 先生が優秀だから	5.1	2.5	3.8
9. 設備がよさそうだから	16.2	0.8	8.5
10. 学費（学校に払うお金）が安くすむから	36.8	39.5	38.1
11. 姉（兄）が通っている（通っていた）学校だから	0.9	2.5	1.7
12. 母（父）が卒業した学校だから	2.6	1.7	2.1
13. 良い学校だといわれているから	6.8	14.3	10.6
14. 男女共学だから	25.6	57.1	41.5
15. 親が決めたから	10.3	14.3	12.3
16. 通学の便が良いから	17.9	21.0	19.5
17. その他	2.6	3.4	3.0

ごらんのように、上位の4項目をあげると、「自由な校風だから」「高校受験がないから」「グラウンドが広く、緑も豊かだから」「公立中学校へ行きたくなかったから」ということになる。

私はこのデータを見て、東大附属の特色をよく知ったうえで入学してきているという印象を受けた。

当然のことながら、このデータは別の読み方もできる。ある県立高校の教師は、私にこう語った。「校長先生、大変でしょう。チャレンジ精神や忍耐力のない生徒が多いのではないですか。規律とか高校入試の重圧とか、そういう困難から逃げようとする生徒が集まってくる学校と読めますよ。」

確かに例えば、文部省の全国統計と比較すると、東大附属では不登校の生徒が多い。その一因として、小学生の時に不登校気味であった子ども、いじめにあった子どもなどが、「東大附属ならうまくゆくのではないか」ということで出願してくるケースが多い、つまり不登校になるおそれのある生徒が、一般に比べて、母集団の中に多いと推測されるのである。

さて、同じく東大附属の中学校1・2年生に、「東大附属は何番目の志望校であったか」聞いたところ、結果は次のとおりであった。

	男 (%)	女 (%)	計 (%)
1. 第一志望	41.0	41.5	41.3
2. 第二志望	21.4	33.1	27.2
3. 第三志望	28.2	22.9	25.5
4. その他	9.4	2.5	6.0

私はこのデータを見て、第一志望と第二志望をあわせれば68.5%だから、いわゆる「本意入学者」が多いとみてよいのではないかと判断した。しかし、東大附属の教員の多くは「不本意入学者が多い」とみており、東大附属の特色を維持しながら本意入学者を増やすにはどうしたらよいかという課題意識をもったようである。

名大附属ではどうか。中学校1・2年生に「名大附属への入学を選んだ理由」(複数回答)を聞いた結果は、次のとおりであった。

みられるように、上位の4項目をあげると、「高校受験がないから」「自由な校風だから」「公立中学校へは行きたくなかったから」「環境がよいから」であり、東大附属の場合とほぼ同じ傾向であると言える。

ただし、東大附属との数字の差異に注目すると、「高校受験がないから」は名大附属では94.5%と格別に高い1位であるのに、東大附属では62.7%の2位であった。

	男 (%)	女 (%)	計 (%)
1. 高校受験がないから	91.9	97.2	94.5
2. 公立中学校へ行きたくなかったから	40.5	53.5	46.9
3. 環境がよいから	28.4	45.1	36.6
4. グラウンドが広く、緑も豊かだから	17.6	49.3	33.1
5. 自由な校風だから	60.8	76.1	68.3
6. いじめや校内暴力がなさそうだから	35.1	29.6	32.4
7. 自分の学力水準に適していたから	24.3	16.9	20.7
8. 先生が優秀だから	2.7	5.6	4.1
9. 設備がよさそうだから	1.4	1.4	1.4
10. 学費(学校に払うお金)が安くてすむから	21.6	35.2	28.3
11. 姉(兄)が通っている(通っていた)学校だから	6.8	4.2	5.5
12. 母(父)が卒業した学校だから	2.7	5.6	4.1
13. 良い学校だといわれているから	17.6	14.0	15.7
14. 男女共学だから	14.9	39.4	26.9
15. 親が決めたから	27.0	29.6	28.3
16. 通学の便が良いから	6.8	11.3	9.0
17. その他	16.2	4.2	10.3

(愛知県の複雑な高校入試制度の影響か?)

「男女共学だから」は、名大附属は26.9%であるのに対し、東大附属では41.5%と高かった。いずれの場合も、女子の数字が倍以上高いことが注目された。

「学費(学校に払うお金)が安くてすむから」は、名大附属は28.3%であるのに対し、東大附属では38.1%と高かった。

他方で、「親が決めたから」は、名大附属が28.3%であるのに対し、東大附属は12.3%と低かった。

「良い学校だといわれているから」は、名大附属が15.7%であるのに対し、東大附属は10.6%と低かった。しかし双方とも、高い数値ではない。

さて、同じく名大附属の中学校1・2年生に「名大附属は何番目の志望校であったか」聞いたところ、次のような結果であった。

	男 (%)	女 (%)	計 (%)
1. 第一志望	63.5	74.6	69.0
2. 第二志望	14.9	11.3	13.1
3. 第三志望	5.4	4.2	4.8
4. その他	16.2	9.9	13.1

名大附属の「第一志望」69.0%は、東大附属の41.3%に比べると、27.7ポイントも高い数値である。

ところで、名大附属の生徒の学年定員は、中学校においては、2クラス80名、高校においては3クラス120名（平成5年度までは135名）である。したがって、（おそらくいわゆる内部進学者を除いた数を合格者数とする）名大附属高校入試が行われている。

そこで、名大附属の中学3年生に、「名大附属学校は中・高一貫の教育体制をとっていますが、仮に機会があるとすれば、あなたは名大附属高校以外の高校に進学したいと思いますか。」と問うてみた。回答は、次のとおりであった。

	男 (%)	女 (%)	計 (%)
思う	51.4	42.9	47.1
思わない	40.0	45.7	42.9
無回答	8.6	11.4	10.0

その理由を問うてみた結果は、次のとおりであった。（選択肢の中から一つだけ選んで回答）

	男 (%)	男 (%)	計 (%)
1. 名大附属では高校卒業後に予定している進路のために不利だから	61.1	71.4	65.6
2. 名大附属学校の校風が自分と合わないから	11.1	7.1	9.4
3. 名大附属学校での人間関係がうまくいっていないから	0.0	0.0	0.0
4. 通学が不便だから	0.0	0.0	0.0
5. 家族の転勤などの事情があるから	5.6	0.0	3.1
6. その他	22.2	21.4	21.9

名大附属の中学校を卒業する頃になって、このままでは大学受験に不利だと、おぼろげながら感じている生徒が、かなりいるということであろう。しかし、名大附属中学校を卒業して、他の高校に転出する生徒は、ごくわずか（数名以内）のようである。

逆に、名大附属高校1・2年生に、出身中学校を尋ねたところ、高1で59名、高2で52名の者が「名大附属中学ではない中学校」と回答した。その生徒に、名大附属高校への入学を選んだ理由を聞いたところ、回答は次のとおりであった。（複数回答）

どうやら回答した生徒は、複数選択可の設問であったのだが、1つだけ選んで回答する設問と勘違いしたようである。（原因は、わからない。）この点は問題なのだが、

	高1 (%)	高2 (%)
1. 進学に有利だから	17.8	18.3
2. 公立高校へは行きたくなかったから	2.1	3.0
3. 環境がよいから	7.7	7.6
4. グランドが広く、緑も豊かだから	5.9	9.1
5. 自由な校風だから	19.5	19.0
6. いじめや校内暴力がなさそうだから	9.4	6.8
7. 自分の学力水準に適していたから	7.7	5.3
8. 先生が優秀だから	1.7	0.0
9. 設備がよさそうだから	0.3	0.4
10. 学費（学校に払うお金）が安くてすむから	5.9	9.5
11. 姉（兄）が通っている（通っていた）学校だから	1.4	0.8
12. 母（父）が卒業した学校だから	0.7	0.4
13. 良い学校だといわれているから	3.1	1.5
14. 男女共学だから	5.2	8.7
15. 親が決めたから	1.7	2.3
16. 通学の便が良いから	7.0	5.3
17. その他	2.8	1.9

数字をみるかぎり、名大附属高校を選んだ理由は分散している。わずかに、「自由な校風だから」と「進学に有利だから」が多いのが目につく。しかしその数値からして、一般に名大附属高校は、いわゆる進学有名校とは意識されていないようである。

ここで、また別のデータをみてみよう。調査対象は、次の10高校であった。

0 番校…X県の、県立普通高校。伝統のあるいわゆる進学校。

1 番校…商業科と普通科の併設校。

2 番校…工業高校である。ただし普通科を併設。

3 番校…歴史の古い農業高校。

4 番校…旧制高等女学校を前身にもった普通科高校。現在は男女共学。

5 番校…旧制中学校を前身にもつ普通科高校。現在は男女共学。

6 番校…私立女子高校。仏教系法人が設置者。「宗教」の時間がある。

7 番校…普通高校。山間に位置している。

8 番校…工業高校。事実上男子校にちかい。

9 番校…普通科が主体。商業科を併設。

1 番校～9 番校は、Y県Z郡に位置する高校のすべてである。6 番校を除けば、すべて県立高校である。普通科に関しては、Z郡が県立高校の1つの「学区」に指定されている。

学校の評価、選択、経営に関する研究

上記10高校の2年生に（この10高校調査の対象は、すべて2年生である）、入学した学校・学科は何番目の学校・学科であるか聞いてみた結果は、次のとおりであった。

校番	第一志望	第二志望	第三志望	その他
0	76.7%	15.9%	4.3%	3.1%
1	48.6%	28.0%	15.0%	8.4%
2	59.9%	27.5%	4.8%	7.8%
3	56.8%	28.4%	6.5%	8.3%
4	75.8%	22.4%	0.6%	1.2%
5	94.4%	3.8%	1.3%	0.5%
6	37.2%	30.1%	9.6%	23.1%
7	53.1%	35.4%	4.4%	7.1%
8	54.6%	29.6%	6.6%	9.2%
9	54.1%	38.3%	4.8%	2.8%
全体	65.7%	23.5%	5.4%	5.4%
男	66.2%	23.3%	5.6%	4.9%
女	65.6%	23.7%	5.1%	5.7%

東大付属の場合、中学校に入学してくるので、このデータとの比較考察はできない。

同じ生徒に、「現在の学校・学科への入学を選んだ理由」を聞いてみた。選択肢は、次の17項目で、複数回答である。

- 1 通学に便利だから
- 2 将来の職業に結び付くから
- 3 大学進学に有利だから
- 4 宗教教育の特色があるから
- 5 自分の学力水準に適しているから
- 6 打ち込みたいスポーツのクラブがあるから
- 7 自分が勉強したい学科だから
- 8 生徒の服装や態度がきちんとしているから
- 9 世間（せけん）で学校・学科の評判がよいから
- 10 中学校の教師に強く勧められたから
- 11 姉（兄）が通っている（通っていた）学校だから
- 12 母（父）が卒業した学校だから
- 13 女子校だから
- 14 男女共学だから
- 15 親が決めたから
- 16 高校を見学したときの印象が良かったから
- 17 その他

結果は、〈別表1〉のとおりであった。

特徴ある数値を示しているのは6番校である。数年前

までは地元民の評判がかんばしくなく廃校がうわさされたというが、経営者（設置者）が変わり、懸命の再建の努力を続けている学校であると聞く。仏教のある宗派が経営母体であり、「宗教」の時間もあるのだが、「宗教教育の特色があるから」と回答した生徒は1.3%にとどまっている。しかし、「生徒の服装や態度がきちんとしているから」28.8%、「中学校の教師に強く勧められたから」62.2%、「女子校だから」16.7%、「親が決めたから」11.5%、「高校を見学したときの印象が良かったから」21.2%は、他校と比べて格段と高く、第1位の数値である。

中学校の教師に勧められて、あるいは親が決めたからという理由が断然多いのは、先の志望順位調査表で、6番校の「第一志望」が37.2%と、他校に比べて断然低かったことと符号している。

ところで、入学志望理由についての先のデータ表は一見しただけでは分かりにくいので、1番校、3番校、5番校、7番校について摘示すると、次のとおりである。

〈学校番号〉→	1	3	5	7
1 通学に便利だから	33.0	32.5	34.6	51.8
2 将来の職業に結び付くから	18.1	22.5	35.6	2.6
3 大学進学に有利だから	1.6	12.4	79.1	0.9
4 宗教教育の特色があるから	0.6	1.2	0.3	0.0
5 自分の学力水準に適しているから	66.6	47.3	49.9	57.0
6 打ち込みたいスポーツのクラブがあるから	6.5	13.0	13.0	12.3
7 自分が勉強したい学科だから	13.7	24.9	6.4	3.5
8 生徒の服装や態度がきちんとしているから	1.6	1.2	24.4	2.6
9 世間（せけん）で学校・学科の評判がよいから	1.2	5.3	45.5	0.0
10 中学校の教師に強く勧められたから	14.3	16.0	12.0	8.8
11 姉（兄）が通っている（通っていた）学校だから	11.8	7.7	16.5	3.5
12 母（父）が卒業した学校だから	3.4	4.7	6.9	0.9
13 女子校だから	0.3	0.6	0.3	0.0
14 男女共学だから	21.2	16.6	18.1	15.8
15 親が決めたから	4.0	2.4	3.1	4.4
16 高校を見学したときの印象が良かったから	5.6	5.9	5.1	0.0
17 その他	8.1	13.0	2.8	8.8

〈単位％〉

「通学に便利だから」で7番校が51.8%と高いのは、同校が山間部にあり、他校へは通学に不便であるという地理的条件を反映している。

「大学進学に有利だから」と「世間（せけん）で学校・学科の評判がよいから」の2つの項目で、5番校が79.1%、45.5%と、ぬきんで断然高いのは、同校が旧制中学校を前身にもつこの地域のいわゆる名門校・進学校だ

からである。

しかし、最も注目すべきは、各校共通して抜きん出た高い数値を示している項目が「自分の学力水準に適しているから」である事であろう。これは、先の志望順位調査表で、5番高校の94.4%は格別として、ほぼ各校とも5割から6割の生徒が「第一志望」と回答している事実と符号するものであろう。

実は私は、昨年（1993年）の夏、この調査の依頼を兼ねて、Y県Z郡の学校への訪問調査を実施している。その時の印象的なことがらを記せば、次のようになる。

A中学校では、ベテランの先生が話してくれた。その中に次のようなくだりがあった。「この地域では、業者テストは昔からありません。高校進学の様子は微妙に変化しています。例えば、成績もトップクラスで生徒会長をやった子が、農業を勉強したい、大学は農学部へ推薦入学で行くといって、親と教師を説得し、農業高校（3番高校）へ進みました。また列車通学の可能な場所に、大学と直結している私立高校ができました。大学へ行くなら何がなんでも5番高校（前身は旧制中学）か4番高校（前身は旧制高等女学校）へ進学しなければという雰囲気は、緩んでいるように感じられます。」

その農業高校の校長は、こう語った。「浦野さんが高校生だった頃（1958-61年）の本校とは全く違っていません。比喩的に言えば、当時の生徒は田畑や果樹園で勉強していました。今は実験室で学習しています。ほとんどが推薦入学なのですが、卒業生の半数近くは上級学校へ進学します。進学の希望がかなえられるように、補充授業も行っています。」

実際、バイオテクノロジーを軸とした同校の施設、設備の近代化・高度化には驚かされた。1番高校（商業科）、2番高校（工業科）でも同様の印象を強く受けた。もっともこのことは、私が職業高校を視察したことがこれまでほとんどなかったことの、単なる告白にすぎないのかもしれない。

ちなみに、3番農業高校の今春（1993年春）の卒業生男子137人のうち進学者は60人（43.7%）、内訳は四年制大学13人、短期大学2人、農林関係学校12人、専修各種学校等33人であった。同じく卒業生女子80人のうちの進学者は35人（43.7%）で、内訳は、同順で3人、7人、3人、22人であった。

Z郡の中で、代表的な「教育困難校」ないし「課題集中校」の一つと目されている7番高校（普通科）の先生がたが、こどもも話してくれた。「教師の捨て身の努力、地元住民の協力、教員加配などのおかげで、ひどかった生徒の“荒れ”は、だいぶおさまってきました。しかし

“信用”の回復はなかなか難しく、私学志向もあり、子ども数の減少の中で、学力面ではオール1の生徒が入学してきています。他面で、上級学校への進学希望も強く、この夏休み中ずっと補習をやっています。私たちはみな滅私奉公の身です。」

7番高校の今春の卒業生の男子116人のうち進学者は41人（35.3%）で、全員専修学校であった。同じく卒業生女子66人のうち進学者は31人（46.9%）で、内訳は短大16人、専修学校15人であった。「四大（四年制大学）は今年はゼロでしたが、生徒の様子から見て来年は期待できます」との話であった。

1番高校（普通科・商業科）では、地元の中学校の3年生とその父母に、1番高校についてのアンケート調査を実施していた。「通学風景を見るにつけ、校風の悪さ、低下を痛感する」「通学の生徒の姿を見ると、だらだらしていて、だらしなさや品の悪さを感じます。人としての初歩的、基本的な指導を徹底してください」などの意見が大きな一群をなしている。

校長先生は、「およそ5%、40～50人の生徒の問題なのですが、住民にしてみれば本校全体の印象になります。なんとかしようとして生徒会でもとりくみを始めています」と話された。

紙幅の関係から十分説明できていないけれども、要するに中学生の保護者・地元住民は、「上級学校への進学の可能性」と「生徒の服装・立ち居振る舞い」を二つの軸にして各高校を評価しているということ、高校入試の偏差値的レベルの上下とは無関係に、すべての高校がその評価を得るために懸命の努力をしている、と事実認識してよいのではないかということである。

Ⅱ 学校の経営課題 —学力問題を中心に—

ここで、国民一般に国立大学附属学校がどのようなかたちで知らされているかの一例を、『週間朝日』1993年11月2日号から紹介しておく。〈別表2〉

さて、中学・高校と思春期、青春時代のまっただ中にある生徒たちが、さまざまな悩みをもつのは当然である。

東大附属の生徒に、悩みについて聞いてみた結果は、次のとおりであった。

ここで特徴的なことは、「学力問題」と「進路の問題」の数値が断然と高く、しかも学年進行とともに高くなってゆくことである。

いま一つは、「友達関係」（「異性関係」ではないことに注意を要する）、「部活動での人間関係」といった領域

学校の評価、選択、経営に関する研究

あなたの現在の悩みについてたずねます（「1.ない」以外の回答の場合は、複数選択）

	中1・2		中3・高1		高2・3	
	(男%	女%)	(男%	女%)	(男%	女%)
1. ない	44.4	26.9	12.3	4.5	11.9	13.9
2. 学力問題	39.3	47.9	65.1	73.6	74.3	67.3
3. 友達関係	14.5	43.7	30.2	45.5	14.9	21.8
4. 異性関係	15.4	21.0	34.9	29.1	38.6	25.7
5. 「部活動」での人間関係	12.8	15.1	21.7	22.7	16.8	5.0
6. 身体の問題（身長、体重、容姿等）	13.7	37.8	51.9	68.2	32.7	43.6
7. 健康の問題	7.7	5.9	13.2	11.8	13.9	16.8
8. ホームルーム担任の先生との相性	6.8	6.7	6.6	8.2	5.0	5.9
9. 教科担当の先生との相性	4.3	5.9	12.3	17.3	9.9	9.9
10. 親との意見のちがいがいい	12.8	17.6	21.7	20.0	4.0	10.9
11. 学校でいじめられている	6.0	4.2	2.8	0.0	0.0	1.0
12. 学校に行けない（不登校）	0.9	0.0	0.9	3.6	0.0	0.0
13. 進路の問題	12.8	11.8	42.5	55.5	56.4	54.5
	1.7	2.5	4.7	4.5	5.0	3.0

さらに「身体の問題」や「教科担当の先生との相性」「親との意見のちがいがいい」といった領域で、中3・高1の学年の数値が判然と高いことである。このことは、私が学校長を併任していて、「うちの学校では、中3・高1の生徒がいちばん難しく、扱いづらいな」と感じることと符合している。

ほとんど全員が高校卒業後の進路として上級学校への進学を希望している東大附属のようなところでは、「学力問題」と「進路の問題」は、とりわけ高学年になれば、ほぼ表裏の関係にあると思われる。

そこで、東大附属の生徒に自分の「学力」の自己診断を求めたところ、次のような結果であった。

あなたは自分があなたの学年として必要な「学力」を身につけていると思うか

	中1・2		中3・高1		高2・3	
	(男%	女%)	(男%	女%)	(男%	女%)
1. 十分身につけている	5.1	5.9	3.8	4.6	6.9	5.9
2. 身につけている	41.9	38.7	20.8	15.6	20.8	36.6
3. あまり身につけていない	35.5	35.3	57.6	60.9	47.5	40.6
4. まったく身につけていない	5.1	3.4	13.2	15.5	21.8	12.9
5. わからない	12.8	16.8	4.7	4.6	3.0	4.0

男女によって差異はあるが、「身につけている」と自己診断する生徒の比率は、高1まで下がり、「身につけていない」の比率は高1まで上がっている。「まったく身につけていない」とする男子生徒の比率は、高3まで上がり続けている。

東大附属の生徒の、上記のような「学力問題」で悩んでいる状況や「学力」の自己診断の状況は、例外的な事態であろうか。

そこで先の10高校調査において、東大附属の場合と同じ質問をしてみた結果は、〈別表3〉のごとくであった。

10高校調査の対象学年は2年生なので、東大附属の「高2・3年」のデータと比較してみると、悩みについては「学力問題」と「進路の問題」が断然高い数値を示していることは同じである。ただし、数値そのものは、「学力問題」において、東大附属の方が高い。

学力の自己診断においても、同じ傾向を示している。ただし、「身につけている」項目の数値は、東大附属の方が高い。

ところで、〈別表3〉の10校調査結果に注目すると、興味深い事実にあつかる。

第1に、「学力問題」で悩んでいる生徒の比率は、旧制中学校を前身にもつ5番高校が72.0%、旧制高女を前身にもつ4番校が63.3%と最も高く、それに対し例えば工業高校である8番校は46.1%と低い。

第2に、学力の自己診断において「じゅうぶん身につけている」と「身につけている」と答えた者の合計は、4番校11.7%、5番校13.7%と最下位なのに対して、8番校は24.5%と最高位にある。

要するに、Y県Z郡においては、いわゆる名門校・進学校の生徒ほど悩んでいると言ってよさそうである。

そこで、10校調査における「学力問題」についての悩みの数値を学科別に集計してみたところ、次のような結果であった。

商業科生徒	47.7%
工業科生徒	46.5%
農業科生徒	47.4%
普通科生徒	62.4%
生活科生徒	42.4%

みられるように、普通科生徒の数値が断然高く、他はほぼ同じ4割台である。

また、学力の自己診断について、学科別に集計した結果は、次のとおりであった。

	商業科生徒	工業科	農業科	普通科	生活科
「じゅうぶん身につけている」	2.8%	3.3%	6.0%	1.8%	3.0%
「身につけている」	22.7%	17.6%	11.3%	14.8%	15.2%
両者を合計した、学力にそれなりの自信のある者	25.5%	20.9%	17.3%	16.6%	18.2%

数値にそう大きな開きはなく、あえて記述すべき事柄ではないかもしれないけれども、数字のうえでは、学力にそれなりの自信のある者の比率は、普通科生徒において最も少ないということである。

上記の問題については、仮説的に次の3点を指摘しておきたい。

第1に、学力の自己診断は、客観的な学力（例えば、「英検」で認定されるような英語力）を必ずしも反映していないということである。

第2に、「学力問題」の悩みは、自己の客観的な学力水準を反映しているよりはむしろ、学校・学科の雰囲気、期末試験などの成績評価の基準や方法、大学・就職試験などとの関係性のもたらすものであろうということである。例えば、Y県Z郡調査では、先生が生徒に要求している学力水準について、「高いと思う」生徒の比率は5番高校が25.7%で最も高く、「低いと思う」生徒の比率は8番高校が25.7%で最も高いのである。この文脈で、東大附属の高2・3年生の回答が、「高いと思う」5.5%、「低いと思う」35.2%であるのは問題であるかも知れない。

上記2点を別の言い方で表現することになるが第3に、職業・技術系の教科に比べれば、英語、数学などのいわゆる普通教科は、相対的にはあるが、各学期もしくは学年において生徒が修得すべき必要かつ十分な内容を明確に提示しにくいことがあげられよう。

第4に、そのうえ普通教科の学習は、大学進学希望者にとっては即受験勉強であり、それは学校を超えた規模での際限のない競争にならざるをえないことである。

さて、話を元にもどして、東大附属の生徒の学習手段と学習時間についてみてみよう。

まず、学習手段について聞いた結果は、次のとおりであった。

あなたは学校の授業と家庭での自習以外に、特別の学習手段を持っていますか（複数回答）

単位%

	中1・2	中3・高1	高2・3
1. もっていない	34.7	33.8	14.9
2. 学習塾（予備校）に通っている	28.8	43.5	74.8
3. 夏休みなどに期限を限って集中的に予備校などに通っている	5.5	10.2	23.8
4. 家庭教師をつけている	5.5	8.3	15.8
5. 通信添削で学習している	29.2	14.8	8.9
6. その他	3.8	3.7	2.5

高校2・3年生になると、7割5分近くの者が予備校などに通い、特別の学習手段をもっていない者は1割5分ほどに過ぎない。こうした現状では、予備校などは何ら「特別の学習手段」とはいえず、ダブル・スクールがあたりまえの高校生活になっているといえる。

東大附属で教師（学校）の側が、そのことを十分計算に入れて教育計画を作成したり、個別の学習指導をしているかという点、そうでは無さそうである。そのことの可否についての議論も、耳にしたことがない。それは、それで一つの見識であるかも知れないが。

多くの生徒が「学力問題」で悩んでいるのだから、予備校などに通うことも含めて、おおいに自学自習に励んでいるかという点、どうやらそうでも無さそうである。

あなたの家庭での「勉強時間」は、通常の月曜日～金曜日を平均すると、1日何時間くらいになるか

（教科についての勉強時間。家庭教師や塾で勉強している時間を含めて計算してください）

	中1・2	中3・高1	高2・3
1. 0分	4.7%	8.4%	8.5%
2. 30分未満	15.3%	19.1%	10.0%
3. 30分以上1時間未満	36.4%	30.7%	15.4%
4. 1時間以上2時間未満	29.7%	26.5%	21.9%
5. 2時間以上3時間未満	10.2%	11.2%	14.9%
6. 3時間以上	3.8%	3.7%	29.4%

家庭で全然勉強しない生徒が学年進行とともに増え、高2・3年で1割近くになるということに、まず驚かされる。宿題など、どう処理しているのだろうか。

「30分未満」という生徒が中3・高1で3割近くいることも、注目される。「3時間以上」が、高2・3で3割近くと、急に増大している。大学受験を意識して、あわてて勉強しだすのか、東大附属に入学してからの既定の方針なのか。後者が多いのではないかという感じがする。

東大附属の生徒は家庭での学習時間が少ないというのが、データを見た時の強い印象であったのだが、10校調査のデータ〈別表4〉を見て、その認識を変えた。

X県0番校は、都市部に位置しており、そこには大手の（全国的な）予備校もある。予備校に通ったり、予備校の夏期講習などに通ったりする生徒が多いのは、そのためである。

Y県Z郡では、その事情は一変する。5番校、4番校の生徒の「通信添削」の比率が高いのと、5番校の「夏期講習」の比率が注目される程度である。

Y県Z郡には予備校が存在しないぶん、学校側が補習授業を組んでカバーしていることになる。そのことについては、先の「学校訪問印象記」でふれた。東大附属では補習授業など一切ないから、そのぶんY県の先生方は苦労しているといえようか。

名大附属ではどうか。特別の学習手段について聞いた結果は、次のとおりであった。(複数回答) 単位%

1. もっていない	中1	中2	中3	高1	高2
	28.4	21.1	25.7	41.7	42.5
2. 学習塾(予備校)に通っている	45.9	49.3	35.7	26.5	39.2
3. 家庭教師をつけている	6.8	9.9	18.6	12.9	5.8
4. 夏休みなどに期限を限って集中的に予備校などに通っている	9.5	11.3	11.4	8.3	14.2
5. 通信添削で学習している	18.9	18.3	10.0	22.0	7.5
6. その他	9.5	2.8	7.1	1.5	2.5

東大附属と比べて目につくことは、高校生で「特別の手段」をもっていない生徒の比率が高いことである。逆に、予備校などに通っている生徒の比率が低いことである。名古屋地方の教育風土かも知れないし、名大附属では高校入試があり、高校段階から他の中学出身者が入学してくるという事情があるためかも知れない。

名大附属の生徒の家庭での学習時間はどうか。

あなたの家庭での「勉強時間」は、通常の月曜日～金曜日を平均すると、1日何時間くらいになりますか。

(教科についての勉強時間です。家庭教師や塾で勉強している時間を含めて計算して下さい)

	中1	中2	中3	高1	高2
1. 0分	6.8	1.4	14.3	15.9	15.8
2. 30分未満	13.5	15.5	7.1	22.0	17.5
3. 30分以上1時間未満	24.3	31.0	15.7	25.8	20.8
4. 1時間以上2時間未満	31.1	39.4	41.4	24.2	25.8
5. 2時間以上3時間未満	13.5	5.6	12.9	11.4	13.3
6. 3時間以上	9.5	1.4	5.7	0.8	5.8
7. 無回答	1.4	5.6	2.9	0.0	0.8

データの区分の違いがあるので、数字のでこぼこはあるが、東大附属と大差は無さそうである。ただし、東大附属の高2・3「3時間以上」29.4%は、目立つ数値ではある。

ところで前述したように、入学を選んだ理由として「高校受験がないから」が東大附属、名大附属で2位、1位を占めていた。

そこで、東大附属の中3・高1生徒に、「東大附属は中高一貫制で高校入試がないことが及ぼす影響について、あなたはどのように感じているか」聞いてみた。結果は、次のとおりであった。

	全体(%)	男(%)	女(%)
1. プラスの面の方が大きい	17.2	21.7	12.8
2. マイナスの面の方が大きい	23.3	25.5	21.2
3. どちらともいえない	59.5	52.8	66.1

「プラスの面の方が大きい」とする者は2割未満であることが気になる。受験という重圧、強迫観念から解放されたところで学び、活動して、個性を拓いてほしいという理念は、なかなか現実のものになりにくい。

東大附属の教員の間でも、「なかだるみ問題」あるいは「中1・高3問題」として、様々な面で認識されている問題があるが、ここでは立ち回らないことにする。

名大附属の生徒にも同じ質問をしてみた。(名大附属の高校生には、他の中学校の卒業生が含まれていることに留意して、データを見ていただきたい。)

	中1	中2	中3	高1	高2
1. プラスの面の方が大きい	34.4	16.9	12.9	6.1	4.5
2. マイナスの面の方が大きい	10.9	35.2	30.0	29.5	36.4
3. どちらともいえない	50.0	46.5	55.7	58.3	50.9
無回答	4.7	1.4	1.4	6.1	8.2

「プラスの面の方が大きい」とする生徒の比率が、学年進行とともに見事に低下して行っている。

ところで、本章のタイトルは「学校の経営課題—学力問題を中心に—」であった。「学力」とは何かについては難しい議論があるところであるが、以上の記述は暗黙のうちに、「教科の成績」や「受験学力」といった言葉から連想されるイメージの学力を前提としている。

ところで東大附属では、そうした教科の学力と並んで、

いやむしろそれ以上に、総合的な学力（分析と総合という場合の総合）、あるいは研究や調査の方法、表現力を生徒に身につけさせ、成就感・達成感を体験させたいと願っている。その具体化の一つが、中1・2のグループ学習、中3・高1のテーマ学習、高2・3の卒業研究（卒業論文・作品の作成、3単位必修）である。(3)

学校長である私も、生徒の希望によって、卒業研究の指導教官となっている。私を指導教官に選んでくる生徒のテーマは、教育問題に関係するものがほとんどである。秋の学校祭には、卒業研究論文・作品がすべて展示され、下級生も父母も直接手にとって見る事ができる。「卒研発表コーナー」も設けられている。

そうした体験から、大半の生徒がまじめに卒業研究に取り組んでいて、中には自分の人生選択と結び付いているテーマもあり、私はこのカリキュラムは大変有意義だと感じている。

そこで東大附属の高2・3の生徒に、卒業研究についてどのように感じているか聞いてみた。結果は、次のとおりであった。

	全体	男	女	(%)
1. 楽しい	42.6	40.6	44.6	
2. 楽しくない	22.3	27.7	16.8	
3. どちらともいえない	35.2	31.7	38.6	

また、卒業研究について1992年3月の卒業生に聞いた（郵送方式、回収数65、回収率58.6%）結果は、次のとおりであった。

- (1)あなたが「卒業研究」にとりくみ、論文を書いたことについて、あなたが現在もっている感想をおたずねします。

	全体	男	女	(%)
1. 自分にとって大変有意義であった	56.9	35.7	73.0	
2. 自分にとってあまり意義がなかった	21.5	32.1	13.5	
3. どちらともいえない	21.5	32.1	13.5	

- (2)あなたの「卒業研究」のテーマと、あなたが現在大学などで学んでいること（専攻の学問など）や将来学びたいと考えていることは、内容的に関係がありますか。就職している人の場合は仕事との関係で回答してください。

在校生が「楽しい」と答えている比率42.6%よりも、卒業生が「大変有意義であった」と答えている比率56.9%の方が、回収率の低さはあるけれども、10ポイント以

	全体	男	女	(%)
1. 密接に関係している	15.4	7.1	21.6	
2. 関係がある	32.3	32.1	32.4	
3. 関係がない	40.0	42.9	37.8	
4. どちらともいえない	12.3	17.9	8.1	

上高いこと（それは特に女子においてであるが）が目される。このことは、卒業研究の内容と自分の進路との関係性によって裏づけられているように思える。つまり、両者に関係があると答えている卒業生は47.7%（特に女子においては54%）に及んでいるのである。

さて、東大附属のアンケート調査結果を読んだ新進気鋭の教育研究者から、次のような感想が寄せられた。

「東大附属のアンケート、とても興味深かったです。なんだか、とっても率直な回答だなあ、というのが第一印象です。いわば「学校当局」が行った調査にもかかわらず、学校批判に類する自由記述が豊富に書かれていることを、どう理解したらよいのでしょうか。「言いたいことをいっても変に詮索されたりしない。」という安心感が全体にあるのかな、とも思ったのですが。

特に進路（進学、もっといえば受験）指導に対しての要望が、子ども・卒業生・父母ともに強かったのが、印象的です。6割以上が、高校受験がないから、を理由に入学してくるものの、在学後は、高校入試がないことについての評価がむしろやけてしまうことから、それはうかがわれますね。

やはりこの辺りの点が、今後の学校での検討課題になるのでしょうか。

私も一応、国立附属の高校に通っていたのですが、その時の印象とはかなり違います。私たちは、「受験勉強」は学校の外的世界とするもの、ときれいに割り切って生活していましたから、学校の授業にはむしろ受験の息抜きの「面白いこと」「凝ったこと」を期待していました。学習指導要領の先取り科目で始まっていた「現代社会」でパレスチナ問題を学んだり、英語で、担当の先生の専門のワーズワースの詩を教えてもらったりしたことが、楽しかった記憶です。一見変な感覚かも知れませんが、学校にまで受験を持ち込まれてはたまらない、という思いが強かったように思います。

このアンケートの中で、卒業研究の評価が高いこと、学校行事の活性化を求めていることを考えると、ことによると、私たちのそうした感覚とそう変わらないのかも知れません。ありきたりの受け身のお勉強ではないこと、参加意識もてる活動については、たとえ受験の役にた

たないことでも、むしろ求めているのかも知れません。

いろいろな場面ですると思いますが、一定の自律性や裁量権のある教育現場に、いま切実に求められているのは、(受験勉強とも、従来型の受け身の授業とも違うという意味での) オールタナティブな授業像、学力像を自前で協同的に構築していくことではないでしょうか。東大附属もまた、それが可能であり、また必要な場かと思えました。

そういえば、『教育のある風景』などで知る限りでは、東大附属はこれまでもそういう努力を蓄積してきた学校、と受け止めていたのですが、アンケートではそのへんが必ずしも評価されていない感じがしました。読み取り不足でしょうか。」

最後に、“東大附属の経営課題—学力問題を中心にして—”ということについては、①グループ学習、テーマ学習、卒業研究について、より魅力的で効果的な指導方法を開発すること、②教科の授業については、東大附属の生徒の実態に即した、しかも中高一貫学校の特色を生かした、各学年ごと各教科ごとの「学校が期待する学力の内容・水準」の提示を含むカリキュラムの開発、③東京都の中心地に位置する学校であることを考慮した、学習習慣形成の指導方法の開発、などが考えられる。

Ⅲ 学校の評価

学校の評価については、①誰が評価するのか(評価主体)、②何のために評価するのか(評価目的)、③何をどう評価するのか(対象、基準、方法)、④何に利用するのか(評価の活用)などをめぐって、様々な議論がある。

東大附属のアンケート調査は、東京大学ならびに東京大学教育学部の自己点検・自己評価活動の一貫であるという意味あいをもっている。

前述した「卒業研究」についてのアンケート調査は、東大附属の個別事項についての在校生、卒業生からの評価であるともいえよう。

ここでは、そうした個別事項の評価の問題は措いて、全体的な評価にかかわる調査結果をとりあげてみる。

まず、東大附属の在校生に「東大附属に入学したことを、現在どう思っているか」聞いた結果は、次のとおりであった。

1と2の合計である「良かったと思っている」が各学年とも8割から9割近くある。

卒業生と保護者はどうであろうか。

ごらんのように、1と2を合わせて「良かったと思っ

中1・2 中3・高1 高2・3 (%)

男 女 男 女 男 女

1. 良かったと思っている	62.4	56.3	47.2	46.4	48.5	62.0
2. 期待外れのところもあるが、 良かったと思っている	26.5	40.3	33.0	40.0	35.6	27.0
3. 期待はずれのところが多く、 失敗だと思っている	5.	0.0	14.2	10.9	8.9	8.0
4. わからない	6.0	3.4	5.7	2.7	6.9	3.0

あなたは東大附属に入学し、卒業したことを、現在どう思っていますか。

	全体(%)	男	女
1. 良かったと思っている	67.7	64.3	70.3
2. 期待外れのところもあるが、 良かったと思っている	23.1	17.9	27.0
3. 期待はずれのところが多く、 失敗だと思っている	6.2	10.7	2.7
4. わからない	3.1	7.1	0.0

あなたは、お子様を東大附属に入学させたことを、現在どう思っていますか。

1. 良かったと思っている	52.4%
2. 期待外れのところもあるが、良かったと思 っている	38.0%
3. 期待はずれのところが多く、失敗だった と思っている	5.0%
4. わからない	4.0%

ている」が、卒業生、保護者とも9割を超えている。特に女子の卒業生では、97.3%に達している。

“これは問題だ”と感じる統計データや、東大附属に対する、あるいは学校長に対する不満や苦情が率直に記されている自由記述欄を読み進め、最後にこのデータに接した時は、“ほっとした”というのが偽らざる実感であった。

しかしながら、自分の学校選択が「失敗であった」と書くには、よほどの理由が必要である。あるいは、自己(自分の選択行為)の否定になる訳だから、「失敗であった」とはなかなか書きにくいであろう。したがって、上記の評価は、甘い評価であると心得ておく必要がある。

他校ではどうであろうか。名大附属の在校生に、「あなたは名大附属学校に入学したことを、現在どう思っていますか」と聞いた結果は次のとおりであった。

	中1	中2	中3	高1	高2 (%)
1. 良かったと思っている	63.5	57.7	41.4	38.6	30.8
2. 期待外れのところもあるが、 良かったと思っている	31.1	29.6	42.9	39.4	36.7
3. 期待はずれのところが多く、 失敗だったと思っている	2.7	7.0	7.1	11.4	17.5
4. わからない	2.7	5.6	8.6	10.6	13.3
5. 無回答	0.0	0.0	0.0	1.7	1.7

1の「良かったと思っている」が、学年進行とともに減り続けている（東大附属の場合は、高2・3で再び上昇している）こと、及び高2の「失敗だったと思っている」が17.5%と東大附属に比べて高いことを除けば名大附属もまた、生徒から高い評価を受けていることがわかる。卒業生、保護者からも高い評価を受けていることも、東大附属と同様であった。

同じ設問での10校調査（高2が対象）の結果は、〈別表5〉のとおりであった。選択肢1と2を合わせたの「良かったと思っている」生徒は、名大附属の67.5%より高いX県0番高校の92.4%、Y県5番高校の89.2%から8番高校の60.5%までの開きがある。8番高校の第一志望入学者の比率が54.6%であるところ、第一志望入学者の比率53.1%の7番高校で「良かったと思っている」者の比率が78.6%であるなど、第一志望入学者の比率と「良かったと思っている」生徒の比率との間に単純な即応関係はみられない。

初等中等学校における、とりわけ国立大学附属学校における学校評価の実践と、その情報公開がさしせまった課題となっている。（日本教育行政学会第29回大会報告、1994年10月2日、於京都大学）

〈注〉

- 1) 中谷彪「附属学校の存在意義を考える」大阪教育大学広報委員会『OKDニュース』第198号（1994年3月21日）、43-44頁。
- 2) 全国国立大学附属学校連盟・全国国立大学附属学校PTA連合会『附属だより』第50号（1994年7月25日）、1頁（「理事長就任のごあいさつ」）。
- 3) 増喜亮子「高校の卒業研究を終えて」『季刊高校のひろば』第11号、1994年3月、35-41頁。東大附属学校編著『教育のある風景』1993年12月、東京書籍、を参照されたい。

学校の評価、選択、経営に関する研究

〈別表 1〉

入学志望理由（複数回答）

	1	2	3	4	5	6	7
0	79.7%	9.8%	36.8%	0.2%	61.6%	7.4%	2.0%
1	33.0%	18.1%	1.6%	0.6%	66.0%	6.5%	13.7%
2	42.9%	29.8%	3.0%	0.0%	53.6%	7.1%	21.4%
3	32.5%	22.5%	12.4%	1.2%	47.3%	13.0%	24.9%
4	35.9%	13.4%	37.9%	0.9%	59.5%	12.0%	5.2%
5	34.6%	35.6%	79.1%	0.3%	49.9%	13.0%	6.4%
6	12.8%	19.9%	18.6%	1.3%	48.1%	5.8%	3.8%
7	51.8%	2.6%	0.9%	0.0%	57.0%	12.3%	3.5%
8	44.7%	50.7%	2.6%	1.3%	45.4%	14.5%	29.6%
9	42.0%	14.1%	5.6%	0.3%	71.8%	12.4%	11.5%
全体	43.7%	20.5%	26.4%	0.5%	58.1%	10.3%	10.3%
男	46.52	24.62	29.62	0.76	52.88	14.55	12.65
女	40.96	16.45	23.27	0.31	63.77	5.9	7.99

	8	9	10	11	12	13	14
0	18.8%	46.2%	8.3%	7.6%	1.1%	0.2%	45.3%
1	1.6%	1.2%	14.3%	11.8%	3.4%	0.3%	21.2%
2	2.4%	0.6%	10.7%	7.1%	1.8%	0.0%	13.7%
3	1.2%	5.3%	16.0%	7.7%	4.7%	0.6%	16.6%
4	8.7%	35.0%	9.9%	8.2%	6.1%	0.3%	15.7%
5	24.4%	45.5%	12.0%	16.5%	6.9%	0.3%	18.1%
6	28.8%	14.7%	62.2%	7.1%	1.9%	16.7%	0.6%
7	2.6%	0.0%	8.8%	3.5%	0.9%	0.0%	15.8%
8	4.6%	2.6%	18.4%	7.2%	3.3%	0.7%	2.0%
9	6.8%	8.2%	8.5%	9.6%	5.1%	0.0%	22.5%
	11.5%	22.0%	14.3%	9.5%	3.9%	1.2%	21.0%
	10.3%	22.6%	12.12	7.27	3.03	0.3	20.83
	12.7%	21.6%	16.45	11.95	4.81	2.17	21.18

	15	16	17
0	3.8%	21.2%	8.0%
1	4.0%	5.6%	8.1%
2	2.4%	1.2%	8.9%
3	2.4%	5.9%	13.0%
4	4.7%	2.9%	4.1%
5	3.1%	5.1%	2.8%
6	11.5%	21.2%	10.3%
7	4.4%	0.0%	8.8%
8	3.9%	7.9%	9.9%
9	2.5%	5.6%	9.0%
	4.0%	8.4%	7.5%
	2.35	6.89	8.18
	5.66	10.01	6.67

〈別表2〉

主な国立大附属中学の偏差値

〈4教科〉

入試日	中学	偏差値
1月23日	岡山大附	43
2月1日	千葉大附	50
〃	埼玉大附	48
2月2日	大阪教大附池田	60
〃	大阪教大附天王寺	60
〃	大阪教大附平野	58
〃	広島大附三原	47
2月3日	筑波大附駒場	73
〃	お茶の水女大附(女子)	68
〃	東京学芸大附世田谷(男子)	66
〃	東京学芸大附世田谷(女子)	65
〃	筑波大附(女子)	75
〃	筑波大附(男子)	65
〃	東京学芸大附竹早(女子)	66
〃	東京学芸大附竹早(男子)	61
2月5日	熊本大附	47
2月8日	広島大附福山	50
2月11日	広島大附	56
2月12日	愛媛大附	40
2月16日	福岡教大附福岡	45
2月19日	神戸大附住吉	49
2月20日	神戸大附明石	49
2月21日	広島大附東雲	45
3月1日	京都教大附京都(女子)	54
〃	京都教大附桃山(女子)	53
〃	京都教大附桃山(男子)	52
〈2教科〉		
入試日	中学	偏差値
1月16日	愛知教大附名古屋	37
2月3日	東京学芸大附大泉(女子)	65
〃	東京学芸大附大泉(男子)	64
〃	東京学芸大附小金井	64
〃	東京大附(女子)	51
〃	東京大附(男子)	45

(合格可能性80%, 四谷大塚進学教室調べ)

’93東大、京大合格者ベスト10及び国立大附属高校の合格実績

東京大		
順位	高校(所在地)	合格者
①	◎開成(東京)	171
②	◎ラ・サール(鹿児島)	107
③	※学芸大附(東京)	104
④	◎灘(兵庫)	104
⑤	◎麻布(東京)	96
⑥	◎桐蔭学園(神奈川)	85
⑦	※筑波大附駒場(東京)	75
⑧	◎巣鴨(東京)	59
⑨	千葉・県立(千葉)	56
⑩	◎駒場東邦(東京)	54

〔11位以下の国立大附属高校と合格者数〕

筑波大附(東京) 48 金沢大附(石川) 26 お茶の水女大附(東京) 19 広島大附福山(広島) 13 大阪教大附池田(大阪) 10 広島大附(広島) 10 大阪教大附天王寺(大阪) 6 京都教大附(京都) 2 大阪教大附平野(大阪) 2

京都大		
順位	高校(所在地)	合格者
①	◎洛南(京都)	147
②	◎洛星(京都)	119
③	北野(大阪)	80
④	◎甲陽学院(兵庫)	72
⑤	◎東大寺学園(奈良)	62
⑥	※大阪教大附池田(大阪)	51
⑦	奈良(奈良)	48
⑧	膳所(滋賀)	47
⑨	◎灘(兵庫)	47
⑩	旭丘(愛知)	46

〔11位以下の国立大附属高校と合格者数〕

京都教大附(京都) 26 大阪教大附天王寺(大阪) 25 大阪教大附平野(大阪) 22 学芸大附(東京) 16 広島大附(広島) 11 筑波大附駒場(東京) 9 筑波大附(東京) 8 金沢大附(石川) 7 広島大附福山(広島) 6 お茶の水女大附(東京) 2

(※は国立、◎は私立、無印は公立、大学通信調べ)

〈注〉『週刊朝日』1993年11月12日号, 148頁。

学校の評価、選択、経営に関する研究

〈別表 3〉

現在の悩み（複数回答）

	ない	学力	友人関係	異性関係	部活動等	身体	健康	
0	14.1%	67.9%	20.3%	25.0%	12.9%	29.7%	13.6%	0
1	16.2%	46.1%	20.6%	21.5%	8.7%	29.6%	11.2%	1
2	22.0%	54.2%	13.1%	20.8%	8.3%	28.0%	7.1%	2
3	17.8%	45.0%	16.6%	26.6%	11.2%	30.2%	12.4%	3
4	14.9%	63.3%	18.1%	23.0%	14.3%	34.4%	9.9%	4
5	10.2%	72.0%	17.3%	24.4%	11.5%	34.9%	12.2%	5
6	12.2%	54.5%	36.5%	21.2%	13.5%	39.7%	12.2%	6
7	24.6%	40.4%	19.3%	20.2%	8.8%	21.1%	4.4%	7
8	23.0%	46.1%	13.2%	27.0%	3.9%	21.7%	11.8%	8
9	7.6%	56.6%	22.3%	32.7%	10.4%	34.6%	12.1%	9
全体	14.6%	58.1%	19.7%	24.8%	11.0%	31.4%	11.3%	
男	18.7%	57.1%	15.6%	24.3%	8.7%	21.5%	11.6%	
女	10.4%	59.2%	23.8%	25.3%	13.3%	41.5%	10.9%	

	H R 担任	教科担任	親	いじめ	不登校	進路	その他	
0	4.9%	6.3%	12.5%	0.2%	0.2%	52.0%	3.1%	0
1	5.6%	4.0%	6.9%	0.0%	0.0%	60.1%	3.1%	1
2	4.8%	8.9%	10.1%	0.6%	1.2%	48.8%	1.8%	2
3	10.1%	9.5%	8.9%	1.2%	1.2%	52.1%	1.8%	3
4	5.5%	7.9%	9.0%	0.9%	0.6%	54.5%	1.5%	4
5	8.4%	8.9%	10.7%	0.8%	0.3%	49.1%	3.1%	5
6	3.8%	5.8%	12.8%	0.0%	0.6%	60.3%	3.8%	6
7	0.9%	3.5%	10.5%	0.0%	0.9%	40.4%	3.5%	7
8	3.9%	8.6%	6.6%	3.9%	1.3%	55.3%	2.0%	8
9	4.2%	4.5%	13.5%	0.8%	0.6%	64.5%	2.3%	9
	5.5%	6.7%	10.4%	0.7%	0.5%	54.6%	2.6%	
	5.2%	7.2%	8.7%	1.1%	0.8%	48.4%	2.8%	
	5.8%	6.1%	12.2%	0.4%	0.3%	61.0%	2.3%	

自分の学力

	①充分	②大体	あまり	全く	わからない	①+②の合計
0	3.4%	16.6%	52.1%	21.8%	6.1%	20.0%
1	1.6%	20.0%	54.4%	14.7%	9.4%	21.6%
2	4.2%	11.3%	63.1%	10.1%	11.3%	15.5%
3	5.3%	13.6%	49.1%	19.5%	12.4%	18.9%
4	1.5%	10.2%	61.2%	20.4%	6.7%	11.7%
5	2.0%	11.7%	62.1%	19.3%	4.8%	13.7%
6	1.3%	18.6%	55.8%	13.5%	10.9%	19.9%
7	0.9%	14.0%	48.2%	13.2%	23.7%	14.9%
8	3.3%	21.2%	57.0%	12.6%	6.0%	24.5%
9	1.4%	21.4%	58.3%	9.6%	9.3%	22.8%
全体	2.4%	15.8%	56.8%	16.4%	8.6%	
男	3.5%	14.2%	55.1%	20.2%	7.1%	
女	1.2%	17.6%	58.6%	12.3%	10.2%	

〈別表4〉

授業や自学自習以外の学習手段

	ない	学習塾等	家庭教師	夏期講習等	通信添削	その他
0	23.0%	53.1%	1.8%	16.3%	29.5%	1.8%
1	93.8%	2.5%	0.3%	0.0%	2.5%	1.2%
2	95.8%	1.2%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%
3	94.7%	1.8%	1.2%	0.6%	2.4%	0.0%
4	73.5%	7.0%	0.6%	3.2%	19.0%	0.3%
5	56.0%	9.7%	1.5%	7.9%	29.5%	2.3%
6	88.5%	2.6%	0.6%	0.6%	3.2%	1.3%
7	93.0%	1.8%	0.0%	0.0%	3.5%	0.9%
8	96.1%	0.7%	0.7%	0.7%	1.3%	0.7%
9	83.9%	8.2%	0.3%	0.0%	9.3%	0.3%
全体	72.0%	13.3%	0.8%	4.5%	14.1%	1.1%
男	70.7%	14.8%	0.8%	4.2%	14.2%	1.0%
女	73.2%	11.9%	0.9%	4.8%	14.1%	1.3%

東大付属	14.9%	74.8%	15.8%	23.8%	8.9%	2.5%
------	-------	-------	-------	-------	------	------

家庭での一日の勉強時間

	0分	30分未満	1時間未満	2時間未満	3時間未満	3時間以上	1時間未満
0	5.2%	12.8%	16.6%	32.1%	22.9%	10.5%	34.6%
1	33.0%	23.7%	23.4%	17.1%	2.5%	0.3%	80.1%
2	46.1%	31.7%	8.4%	10.8%	2.4%	0.6%	86.2%
3	50.9%	27.2%	8.9%	8.9%	2.4%	1.8%	87.0%
4	8.7%	21.6%	24.5%	30.6%	11.4%	3.2%	54.8%
5	2.8%	6.1%	12.0%	31.3%	33.3%	14.5%	20.9%
6	10.9%	17.9%	34.6%	21.8%	11.5%	3.2%	63.4%
7	42.1%	25.4%	16.7%	14.0%	0.9%	0.9%	84.2%
8	49.3%	25.7%	12.5%	8.6%	3.3%	0.7%	87.5%
9	11.5%	32.4%	26.5%	19.7%	8.5%	1.4%	70.4%
全体	19.6%	20.7%	18.9%	22.6%	13.1%	5.0%	59.2%
男	25.2%	22.7%	15.7%	20.1%	11.0%	5.3%	63.6%
女	13.9%	18.6%	22.3%	25.2%	15.2%	4.8%	54.8%

東大附属	8.5%	10.0%	15.4%	21.9%	14.9%	29.4%	33.9%
------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

学校の評価、選択、経営に関する研究

〈別表5〉

入学して、現在どう思っているか

高校番号	①期待通り	②よかった	失敗	わからない	①+②学校評価
0	59.1%	33.3%	4.0%	3.6%	92.4%
1	36.5%	34.9%	19.5%	9.1%	71.4%
2	45.5%	34.1%	13.8%	6.6%	79.6%
3	26.6%	43.2%	21.9%	8.3%	69.8%
4	49.0%	33.1%	9.4%	8.5%	82.1%
5	63.4%	25.8%	5.7%	5.2%	89.2%
6	39.1%	33.3%	15.4%	12.2%	72.4%
7	52.7%	25.9%	6.3%	15.2%	78.6%
8	23.7%	36.8%	32.2%	7.2%	60.5%
9	52.5%	33.3%	6.8%	7.3%	85.8%
全体	48.2%	32.9%	11.5%	7.4%	81.1%
男	47.9%	31.4%	13.2%	7.5%	79.3%
女	48.8%	34.6%	9.5%	7.1%	83.4%

		期待どうり	よかった	失敗	わからない
東大附属	全体	55.2%	31.3%	8.5%	5.0%
高Ⅱ・Ⅲ	男	48.5%	35.6%	8.9%	6.9%
	女	62.0%	27.0%	8.0%	3.0%

学校評価と第一志望の比率

学校評価	学校番号	第一志望の比率	差
92.4%	0	76.7%	-15.7
89.2%	5	94.4%	- 5.2
85.8%	9	54.1%	31.7
82.1%	4	75.8%	6.3
79.6%	2	59.9%	19.7
78.6%	7	53.1%	25.5
72.4%	6	37.2%	35.2
71.4%	1	48.6%	22.8
69.8%	3	56.8%	13.0
60.5%	8	54.6%	5.9
86.5%	東附	41.3%	45.2